

家族意識の形成に関する研究（第1報）
—夫婦別姓に対する態度形成に関連する要因について—
聖霊女子短大 ○佐々木久長 佐藤了子

【目的】夫婦別姓に対して賛成している人と反対している人との違いはどこにあるのだろうか。本研究では、家族や社会保障、そして性格特性などに関するいくつかの質問を通して、両群の意識の違いを調べることを目的として行った。

【方法】夫婦別姓への意見と改姓の希望から、賛成群（28名）と反対群（46名）を設定した。そして「夫婦別姓が与える影響」「家族に対する意見」「老後の生活」「社会保障制度」「社会指向性・個人指向性」などを独立変数として判別分析を行い、夫婦別姓に対する意見形成に影響する要因を求めた。対象は短大生の娘を持つ母親138名である。

【結果】判別に寄与する要因として、別姓による家族関係や女性の自立への影響、老後の生活に対する考え、そして社会指向性が抽出された。夫婦別姓賛成群は、夫婦別姓になっても家族や夫婦関係は変わらず（悪くはならない）、現在の家族制度を否定的に捉え（女性の自立にとってマイナスで女性が犠牲になっている）、老後は一人又は施設で暮らすつもりでいる（子供とは一緒に暮らさない）ということがわかった。また、別姓反対群は社会指向性が高い（他者との関係を重視し、自分が役に立つ存在でありたいと思う）反面、「自分が何をやりたいのかわからない」という項目が別姓賛成群よりも高かった。